
牙狼＜GARO＞～INFINITE SENKI～

龍気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牙狼＜GARO＞～INFINITE SENKI～

【Nコード】

N4281BA

【作者名】

龍気

【あらすじ】

世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」・・・通称「IS」。

”女”にしか扱えない最強の兵器によって世界は「女尊男卑」の時代へと変わった。

それによって生まれる陰我によって世界は再び「陰我集延期」へと突入し、魔獣^{ホラー}にとって快適な世界となりつつあった。

これは・・・黄金の鎧を纏いしホラーと戦う運命を受け入れた少年
と、絶望の中で前を向き続ける事を誓った少女の物語・・・決して
目を逸らすな。

『GARO編・プロローグ』（前書き）

牙狼第二期を見ていたら書きたくなりました。

本当にごめんなさい。

『GARO編・プロローグ』

此処は何所とも取れない空間に存在する場所。

魔戒騎士や魔戒法師と言った、特定の数名しか立ち入る事の出来ない場所・・・その名は『番犬所』。

そこに1人まるで神話の世界の登場人物の様な恰好をした者、この番犬所の管理者である神官が佇んでいた。

「・・・世界がこの様になって早10年・・・世界の陰我が強くなった、特に一か所・・・この東の管轄内にある『IS学園』、この場所には様々な理由から世界中から陰我が向けられ特に強い・・・このままでは1世紀近く振り・・・第二次世界大戦以来の、『陰我集延期』に突入しかねん・・・」

『陰我集延期』とは彼等魔界に関係する者達が呼ぶ地獄の事だ。

『陰我』とは古代有数、森羅万象に宿る“闇”の部分、それが宿るオブジェをゲートにして奴等『魔物』はこの世に現れ、人に取り付き人を魂ごと喰らう。

だがホラーにも活動、出現する時間がある・・・それは夜。

しかしこの陰我集延期の間、ホラーの出現は頻繁化するだけでなく、朝昼関係無く現れ活動する。

過去に幾度とこの陰我集延期が訪れた、第二次世界大戦等の世界規模の大戦争、貴族主義時代による民衆の嘆き、この陰我集延期は自然発生ではなく、時代の流れの中で多くの人の陰我が発生する時に起きる。

「故に君にはこのIS学園に行って・・・いや、入学して貰う」

神官が後ろに立っていた白いロングコートを着た、凛々しく整って女性とも思える顔立ちに、左手の中指に髑髏の様な指輪を付けた男が立っていた。

「俺は別に構わないが・・・何故入学する必要があるのです？」

「その方が都合が良いと判断したのだ、内部から陰我の発生を抑えるのにな・・・それに君の目標の為に都合が良いだろう？」

「・・・俺の目標・・・」

『良いんじゃないのか？お前には“アレ”がある事だし・・・もしかしたらこっじゃ掴めない情報が手に入るかもしれないしな』

突如男の左手に嵌めている指輪が男に向かって喋りだした。

指輪の名は『ザルバ』、魔導輪である生きた指輪だ。

「……良いだろう、俺もその方がホラーを狩りやすい」

「指令はこっちで常時送る……それと大丈夫だとは思うが間違っても……」

「分かっている……魔戒騎士としての務めを優先にする……それが俺の使命だからだ」

「うむ……入学の手筈は君なら簡単だろう、頼むぞ……
牙

男……『冴島鋼牙』神官に頭を下げ、番犬所から出て行った。

「IS学園に入学……いや、今の時期からなら転入か……」

『学校か……一旦どんな所なんだろうな』

「さあな……俺は小学校までしか通わなかったからな……それ以降の勉学は独学と周りの者から学んだから今更行く必要も無いがな」

『それにISに関してもそこら辺の学生……いや、大人よりも知っているしな』

「取り敢えず今からIS学園に向かう」

『何だ？学校に通える事が待ちきれないのか？』

「違う・・・何となくだが嫌な予感がする・・・」

『珍しいな・・・お前が「何となく」と言った曖昧な感覚で行動しようとするなんてな』

ザルバは今回の鋼牙の行動動機が珍しい所為か、声のトーンが少しだけ上がった。

「・・・俺も人間だ・・・そんな時もある・・・それに・・・」

『それに・・・何だ？』

「・・・いや、何でもない」

そう言い鋼牙はIS学園に向かって歩を進めた。

（何だ・・・この言い様の無い不安は・・・IS学園・・・一体何が待ち受けている）

この一步が・・・彼を真の魔戒騎士へと・・・『護りし者』へと成長させる戦いと出会い・・・いや、“再会”への始まりであった。

『GARO編・プロローグ』（後書き）

鋼牙「一つ聞きたい」

龍気「何？」

鋼牙「何故俺の顔が若干女顔なんだ？」

龍気「いや・・・ISに絡めるとしたらその方が面白いかと」

鋼牙「ふざけるな！！」

ザルバ「まあ良いじゃねえか鋼牙、結構美人だぜ」

鋼牙「嬉しくとも何ともない」

ザルバ「ふ・・・もう少し柔らかくならないものかね・・・」

龍気「因みにこの作品の鋼牙は現在17才と言う設定だ」

鋼牙「何故？」

龍気「その方が・・・フフ・・・」

ザルバ「如何せ碌な事考えてるんだろ？まったくそんな暇あったら今やっているのを終わらせろっての」

龍気「返す言葉もございません・・・如何も詰まると他のネタを考えてしましまして・・・」

ザルバ「まったく・・・次はI S編のプロローグだ、見てやってみよう」

『IS編・プロローグ』(前書き)

GARO編に続きましてIS篇のプロローグです。

『IS編・プロローグ』

私の見る夢によく・・・決まってその絵本が出てくる。

夢の中の私は5歳位の頃の子供で、当時お気に入りだった場所での絵本を読んでいた。

お母さんが初めて枕元で読んでくれた・・・お母さんが作った絵本が・・・大好きだった・・・死んだお母さんとの大事な思い出の絵本が。

黄金の鎧を身に纏った騎士が、悍ましい怪物を打倒して行く・・・でも、その最後のページの内容だけは思い出せない・・・真っ白だったから。

まるで最初からそのページだけが最初から存在していなかったかのように思い出せないでいた。

何時もなら此处で目が覚めるのに・・・最後のページを捲った瞬間、世界が変わった。

「えっ？何？何なの？」

辺りが闇に染まって、枯れ果ててお化けの様に枝を屈折している木々に覆われた森の中に今の私が居た。

まるで・・・今の私の心を表している様な光景だった。

お母さんが死んで、あの家に引き取られ、愛されず、自由も許されない、皆を騙し続ける自分……嫌な事を嫌とも言えず、只そうする事しかできない自分……今私の中にあるのは……まさにこの光景に相応しい……絶望しかなかった。

あの時・・・彼に此処に居て良いって言ってくれて本当に嬉しかった・・・希望が湧いた・・・でもそれはたったの3年。

長い様で短い時間・・・ハッキリ言って今の状況を改変するほどの案なんて無い・・・例え庇ってくれる人がいてくれていても、所詮は学生に一個人・・・私も代表候補生とは言え・・・その立場と権限が無ければただの子供に過ぎないんだ。

「ギギ・・・」

「えっ？」

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「きやあああああああああああああああああああああああ
ああああああ！」

闇の奥から悪魔が・・・絵本に出てくるような悍ましい怪物が複数私に向かって飛翔して来た。

私は逃げようと……しなかった。

「はは・・・これって日本で言う正夢なのかな？何れこうなるっていう・・・私の未来を表しているのかな？」

もう・・・疲れたよ・・・ゴメンね・・・力になってくれるって言ってくれたのに・・・一夏・・・ゴメンね・・・お母さん・・・。

私は目を瞑り下を向いて何もかもを投げ出そうとした・・・。

『駄目だよ・・・どんなに辛くても下を向いちゃ』

「えっ？」

突如男の子の声で私を励ます声が聞こえた。

私は辺りを見渡すとそこには1人の・・・10歳にも満たない男の子が立っていた。

私の記憶に無い・・・いや、この子にはどこかで合った事が・・・

ガシッ

「へっ？」

『君の希望は・・・必ず現れる』

黄金の騎士が私にそう呟くと、突如花畑に突風が吹き荒れ・・・舞った花卉で黄金の騎士の姿が見えなくなった。

私も思わず目を瞑ってしまつて・・・次に目を開けると・・・

「・・・・・・・・夢・・・・・・・・だよね・・・・・・・・」

最近になって見慣れた天井が目に入った。

「おはようシャルル・・・・・・・・よく眠れたか？」

「一夏・・・おはよう」

ルームメイトの織斑一夏・・・世界で唯一ISを起動させることのできる男の子。

私の・・・僕の秘密を知る男の子。

「今日はいよいよ学年トーナメントの日だ・・・・・・・・ううう緊張する・・・・・・・・」

「大丈夫だよ一夏・・・今日の為に一生懸命訓練して来たんだから・・・それに僕もいるよ」

僕と一夏は今日IS学園の開催される学年トーナメントでタッグを組んで出る事になっている。

「俺は先に食堂に行って場所取りしてるから、シャルルも後から来いよ」

「うん・・・着替えたらずぐ行く」

一夏が部屋を出たのを確認すると僕は今来ているジャージから制服に着替える為にクローゼットの前に立った。

着替えながら先程の夢について考えていた。

「あの夢・・・非現実なのに異様に現実味があったと言うか・・・それに何故あの絵本の騎士が・・・それにあの男の子」

『駄目だよ・・・どんなに辛くても下を向いちゃ』

「あの言葉・・・何処かで・・・男の子も何処かで合ったような・・・」

男の子について思い出そうとしながら着替えを終えた僕は、鏡の前に立つ。

分かってはいるが、鏡には男子生徒用の制服を着た僕の姿が映っている。

「・・・この格好にも・・・見慣れちゃったな・・・」

鏡に映る僕の顔は・・・何時も沈んでいる。

今の僕の名前はシャルル・デュノア・・・でも、夢であの騎士が言った言葉。

『君の希望は・・・必ず現れる』

「あの騎士は・・・あの男の子？希望・・・」

本当に・・・現れるかな・・・だとしたら、少しだけ鏡の中の僕の表情が柔らかくなった気がした。

何時か・・・“私”に戻るかもしれないと・・・“シャルル”じゃない“シャルロット”に戻るかもしれないと。

「うん！確かに下ばかり向いていちゃいけないね、一夏みたいな人にも出会えたんだ・・・前を向いていれば何時かは・・・」

今日も1日が始まる・・・そして・・・私の運命が大きく変わり始める事を、この時の私は知るよしも無かった。

『IS編・プロローグ』（後書き）

シャル「単刀直入に聞くけど・・・これもそうだけど他の作品も終わらせられるの？」

龍気「・・・最近本当にISにハマってしまっ

ザルバ「一年ほど遅れてな・・・」

シャル「まあ・・・頑張っ

龍気「あい・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4281ba/>

牙狼<GARO>～INFINITE SENKI～

2012年1月11日13時46分発行